1018
10

逍遙文庫
文庫6
953
10

新編金瓶梅

十集上

馬琴作

豐國画

甘泉堂梓

文庫6
953
10

新編金瓶梅十集

上帙 上

曲亭馬琴作

一陽齋豐國画

新編金瓶梅第十集小序

物始あるハ必終あり。年の始の門松、冬の終の煤掃竹を渚りとゝ櫻咲く野の花茫ハ紅葉まる山の毛氈と終るとき酒ハ礼ふ始りて乱ふ終り色ハ惑ひふ始りて別ふ終る稚子毎の竹馬ハ老ての後の杖を終りとし。紅顔なる新婦ハ雪の白髪の岳母を終りとき浮世ハ走馬燈の輪廻りて盡るとる只その理りのみならず善悪応報の虚しからぬふ。ある亦環の造るが如し。一善進めバ一悪退く便是正路なり。倘悪人時を得て行いるゝことあれバ善者隠るゝを得ざること行ふ。此ハ是邪徑ハ猶勍風猛雨の五穀を破り嶂氣毒水の魚鼈を害ふと亦何ぞ異なるべき。然れども天運正路ふ復りて日月隈なく照らとき悪棍亡びて善人栄え其名両るゝら世ふ貽りて後車の戒言ふ做まる者彼西門屋啓官郎ヲ金阿蓮ハ幾層の美人一旦不義の富を做せるも大原武二郎武松ハ孝悌義勇の大刀風ふ芟盡さゝ大團圓まで知音ハ有ふのみ。刊行中絶まりしふ今や發兒の時至りぬそ。甘泉堂の求るまふく十集揃の全書となりたふ終りまりてを作者の用心始よりまく意味あるを有眼不見眼乖不乖知るも知らぬも推並て拍掌驚奇せざるもなくふの書の終りを亦始よる正木の夢繰り返しを長く久しく世の看官ふ幸弁るゝ幸あれ。とる前勝ふ壽祝の筆を代書ふ任せて序を。

曲亭馬琴重題

弘化紀元甲子春正月吉日發

春の貝
第一
梅見客
苞を
巻戸乃
蜆とのれ
直木直平
大原夢松

夏の貝第二
生鮑乃命
めでたき
暑氏
命婦
琴柱
糠利
名四郎

横車牛八

秋の貝 第三

蛤を

月待ち

宿や捕の子

鬼柳

八角

冬の貝 第四

今買し

牡蠣を

紙ぐり

薄氷

鼻嵐

豚六

牟尼

無三太

春の貝 第五

貝殻の花散る

蜜や

女僧陸水

沙弥白水

松
車

と
妙

松

上
木

直
松

角

松
と
陸
白
水

牛
角
豚

新編金瓶梅十輯　四冊　曲亭馬琴翁作　一陽齋豐國画

世冊子初篇の出板ようこと浅い今こゝ十輯ようて錦絵編ふ毛はりうく合巻冊子の書く年と経て一紙と逆ぐること最稀之又今絵柳
ハりく水滸伝より出藍するりのそて小説中の雄ようそと傾冠の奇ち妙案ぐれて
筆にあゆぐれ彫化なれハ拙者上手と謂ふやいたんまうこと仕未習者の奇ちなりう

女郎花五色石臺　初編　曲亭馬琴翁作　四冊　一陽齋豐國画

女郎花の一篇も亦冊子に仮出ようと雖近動筆と雖て他と止られ
迷のようて出板する而ハ浅くかゝ仮とい一とも
校打せ仮敷ようりのうくこの比世一出行
て寄書ふ妙ぐの形案ふれが看官ようそふ春手の冊子と一紙ふ考こ

児雷也豪傑譚七編　美圖垣笑顔作　一陽齋豐國画

新編
歌舞瓶梅
中集 上帙 下

西京子高著
一陽齋豊國画

新編 金瓶梅

十集之二

弘化四丁未春

孟泉画

曲亭馬琴作

一陽齋豊国画

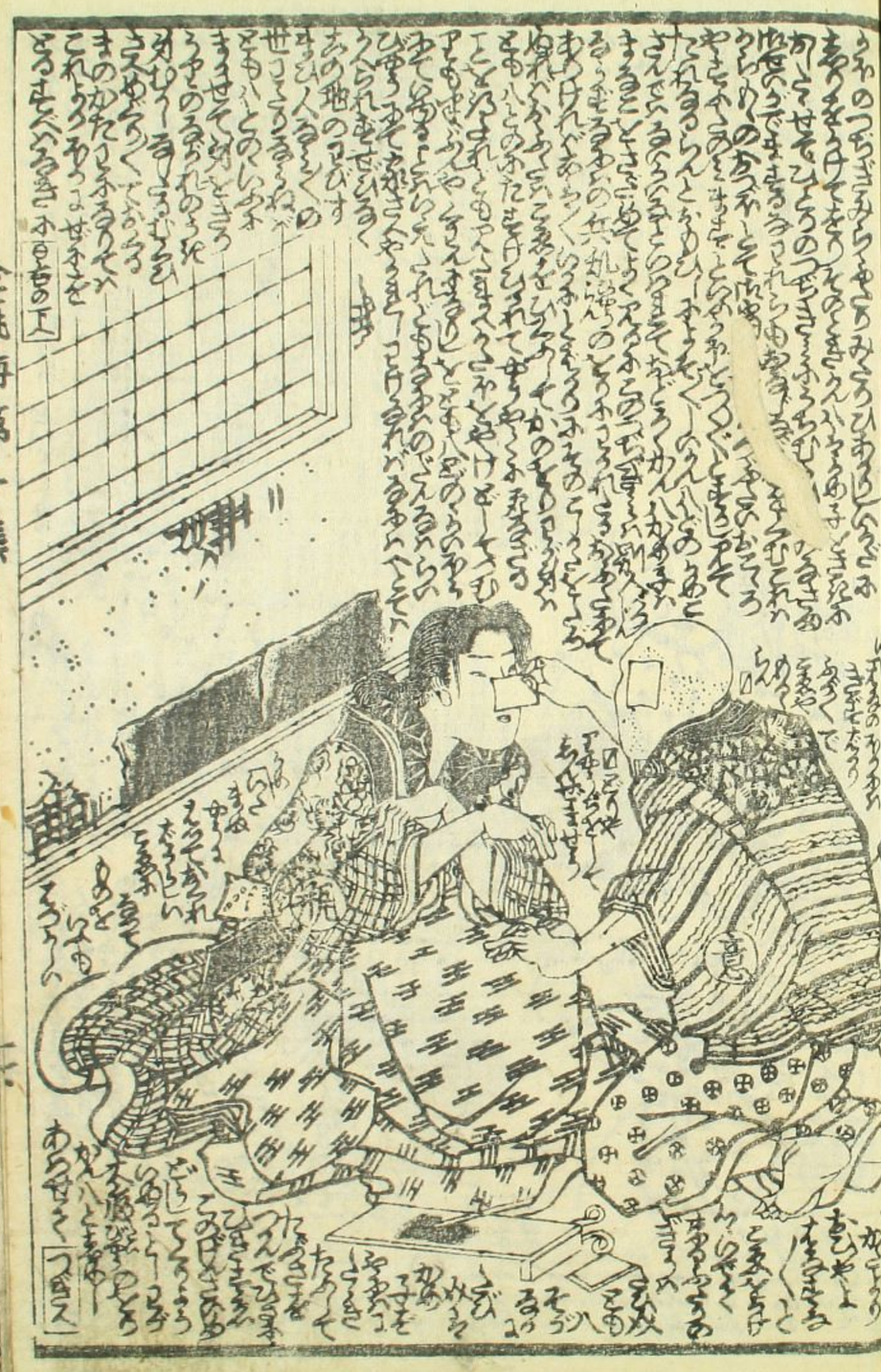
甘泉堂梓

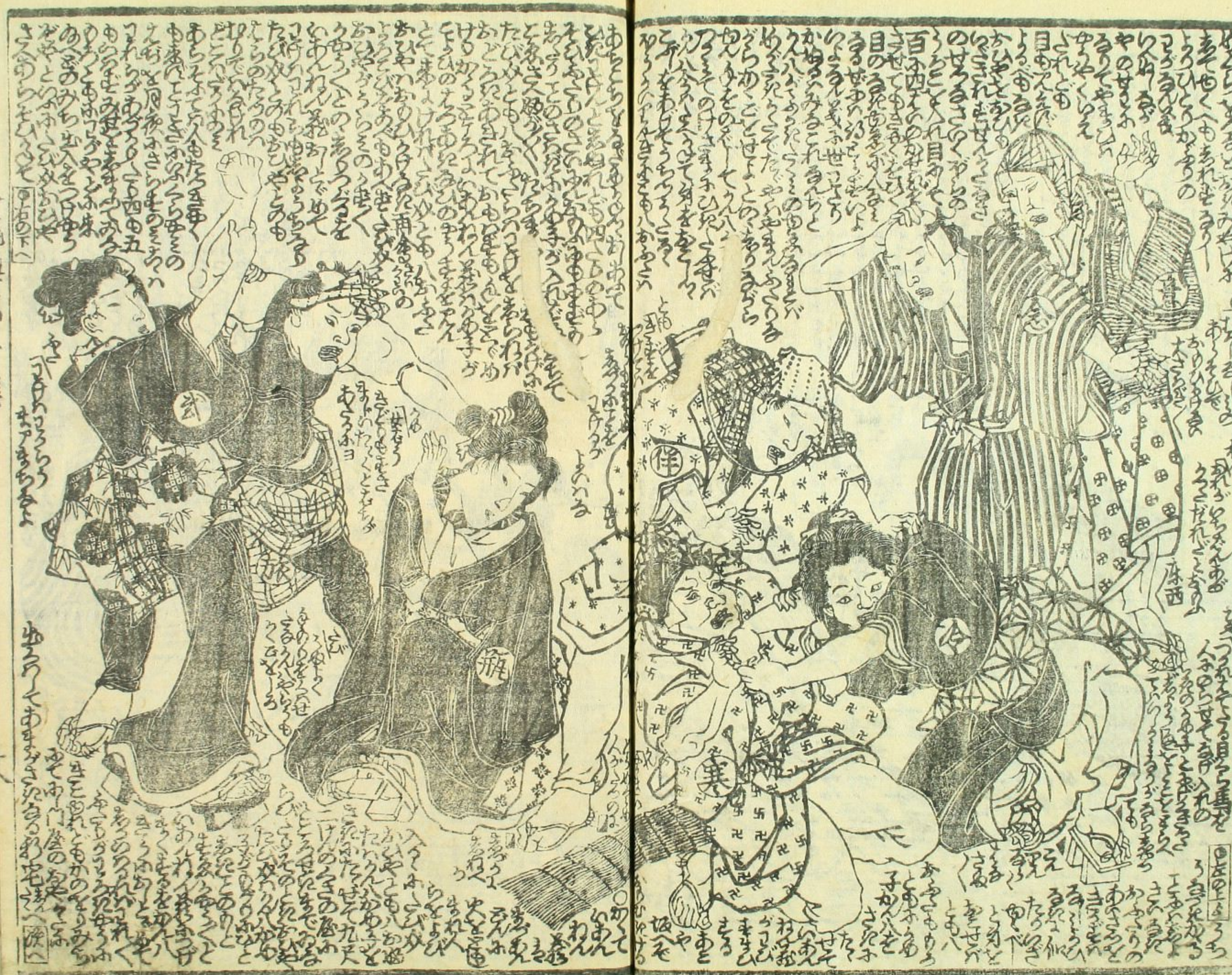
老

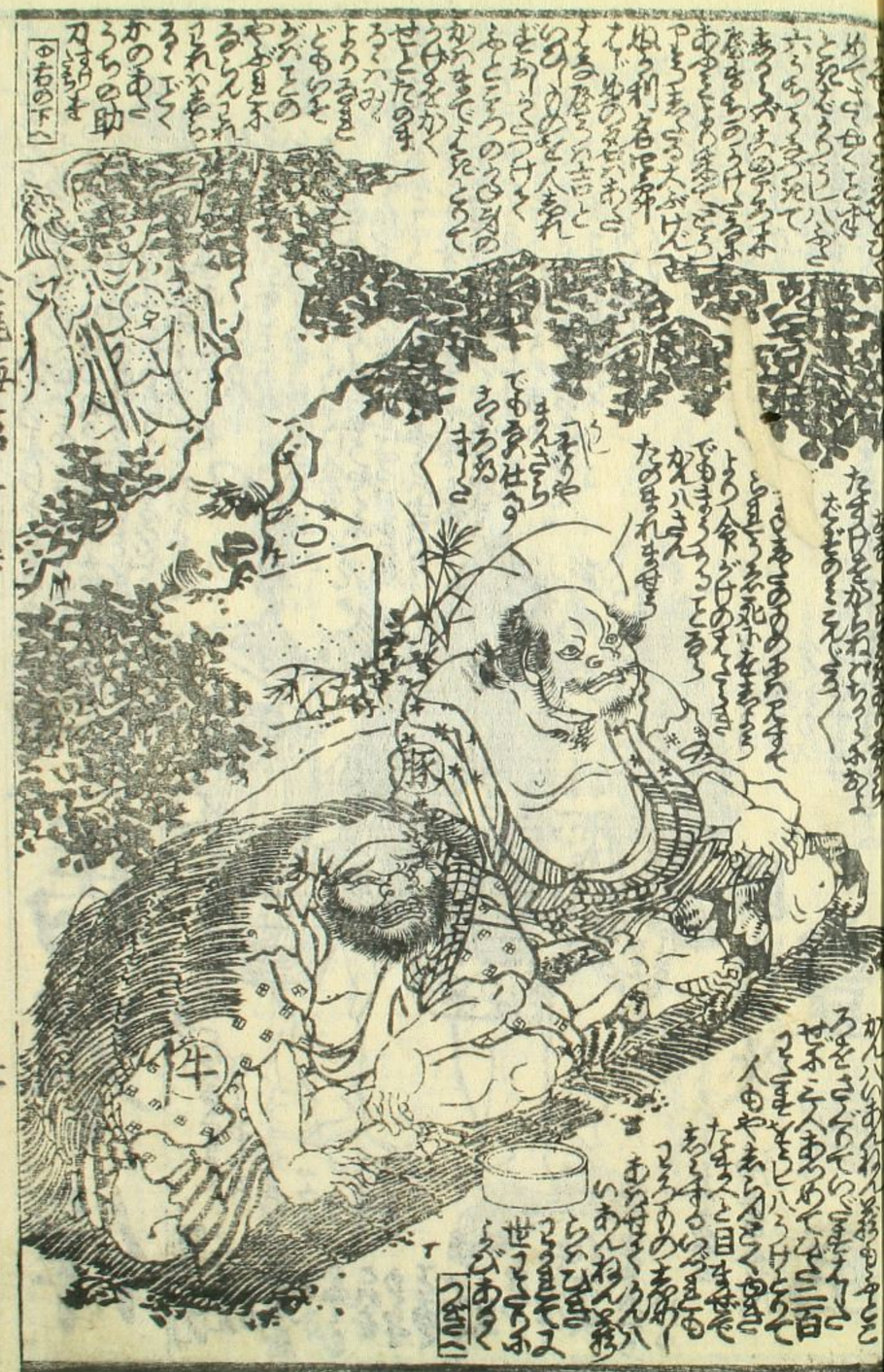
源
瓶
実

槍
爭
意
念
寒
瓶

寒






牛
豚

口中
寒
念
意

甘泉堂蔵板略目

壽福三十本大鏡

世にいせおの新板多しといへども大鏡に勝るものなし

源氏繪かるた

絵彩色

江戸流行菓子話船橋

元食司に精密なる小菓子の名を天保年間より流行せし菓子の一流相伝元とよばれる和橋屋の製乃仕法分量お秘の口傳ものしるすべしくつまびらかにして菓子のよろづ千菓子のこと物ふつるまで二十ケ條あり菓子通の佳話一覧人を弄ふ

源氏寄かるた

第入

江戸書肆

芝神明前　和泉屋市兵衛

新撰
金瓶梅
千集下
馬琴作
豊國画 甘泉
豊輝

抱

新編金瓶梅

十集 上 下帙

曲亭馬琴作

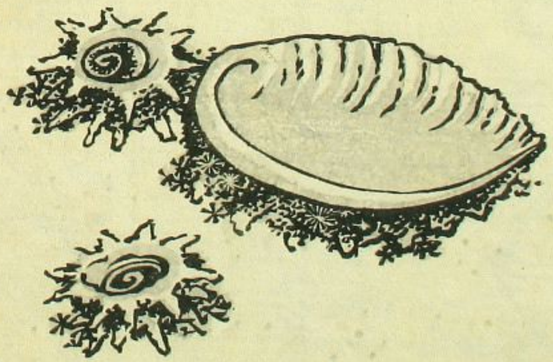
一陽齋豐國画

新編金瓶梅十集之三

曲亭馬琴作

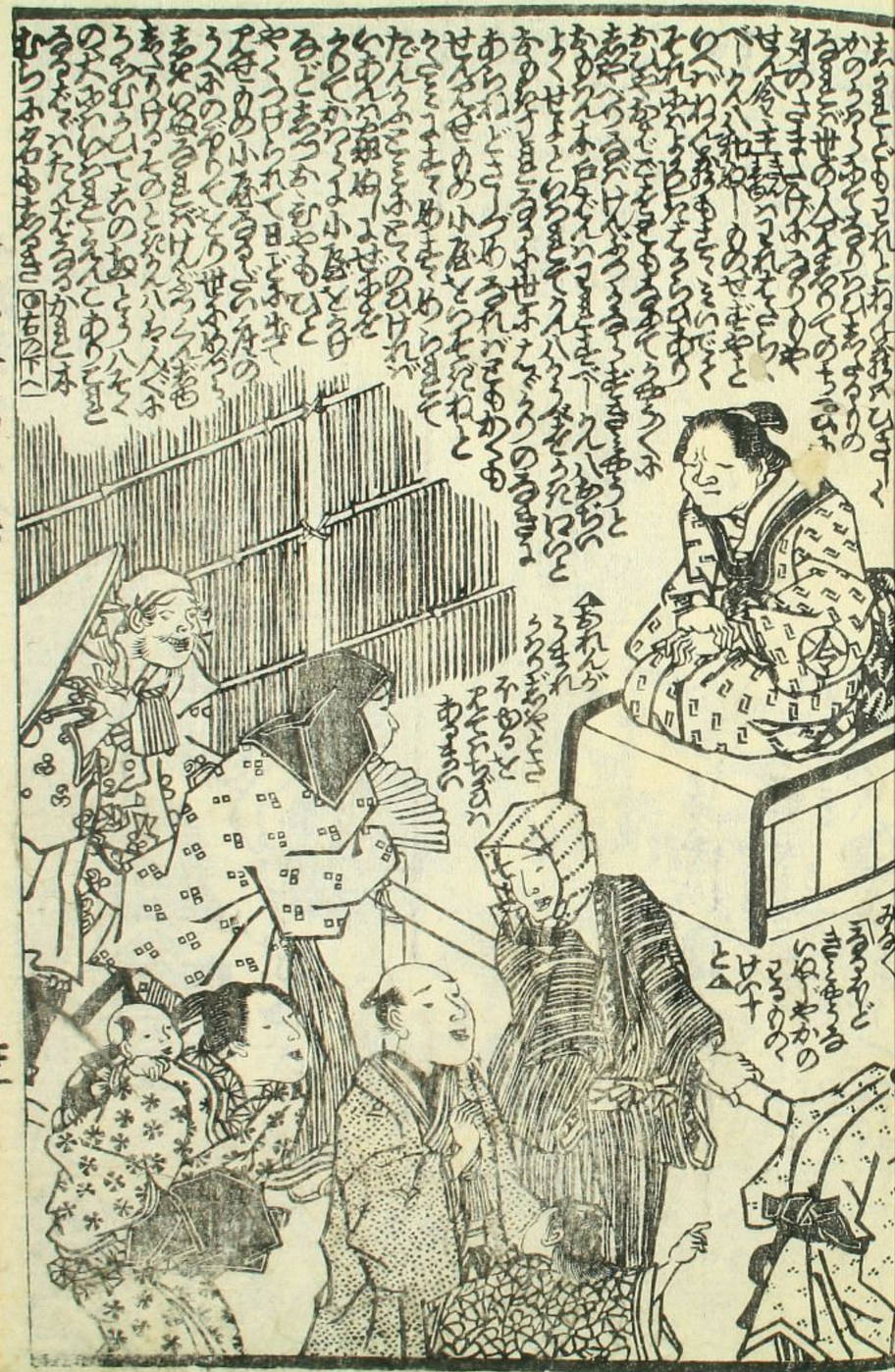
一陽齋豐國画

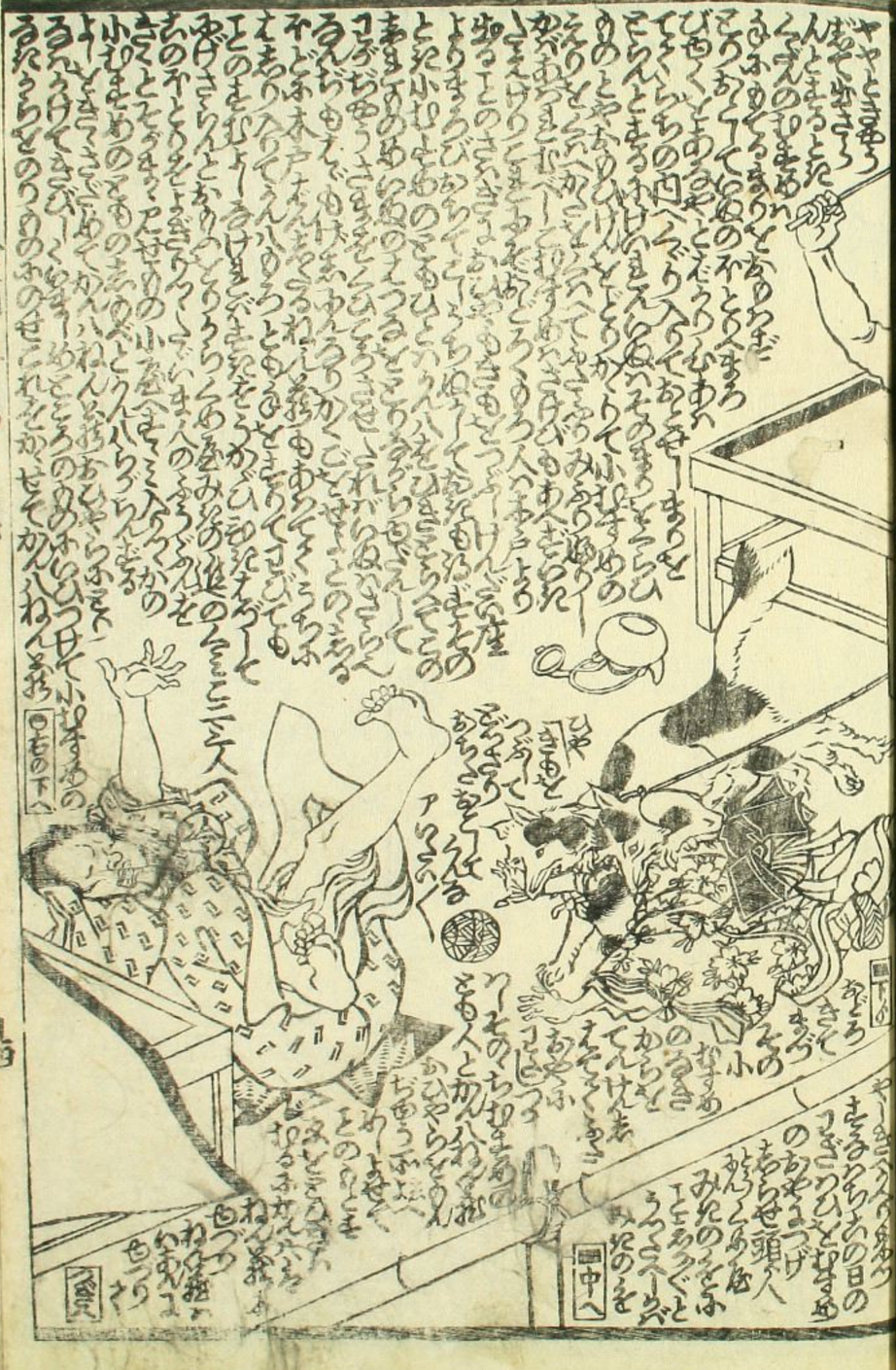
甘泉堂梓

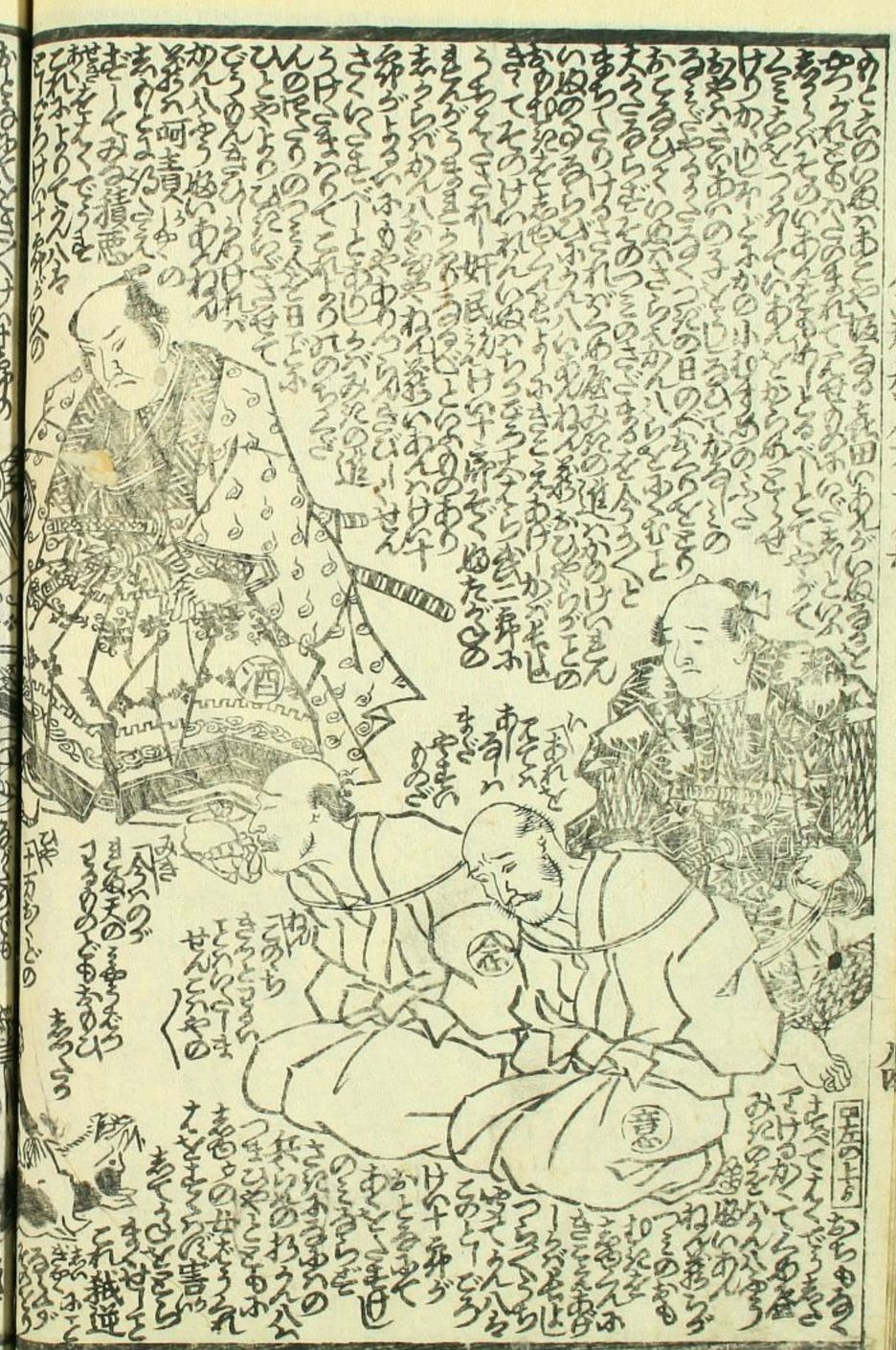


浄
名
左の上方
左の中方
右の中へ
右の下へ

●左の上の方に紙ぢがころりゆてのぬとひどく
あるるひろひろるべー者
紙代四十九才ゆて身ご
りのてようあさまやや
うこちとせーいたのの
いぬるりさんげのくめ
あるうりてざの
たてまるるはいひるうんく
ところくろやるふよぶい
まばけんぶつのろうゆく
男女ふ一茂のとゆぞおりひ
けるあるふこのいぬハるろ
ぶちゆてひてひふ十の字の
どたあり又身よいかるる
のケイの字レンの字の
如たぶちもありけまば
宝ばいふとハるくぐ子の
ぬハけへ十あまんぶ
うままーうりろり
とて名を啓蓮坊
とよびーうばひまち
むんぬくたく
るりけり







右の下へ

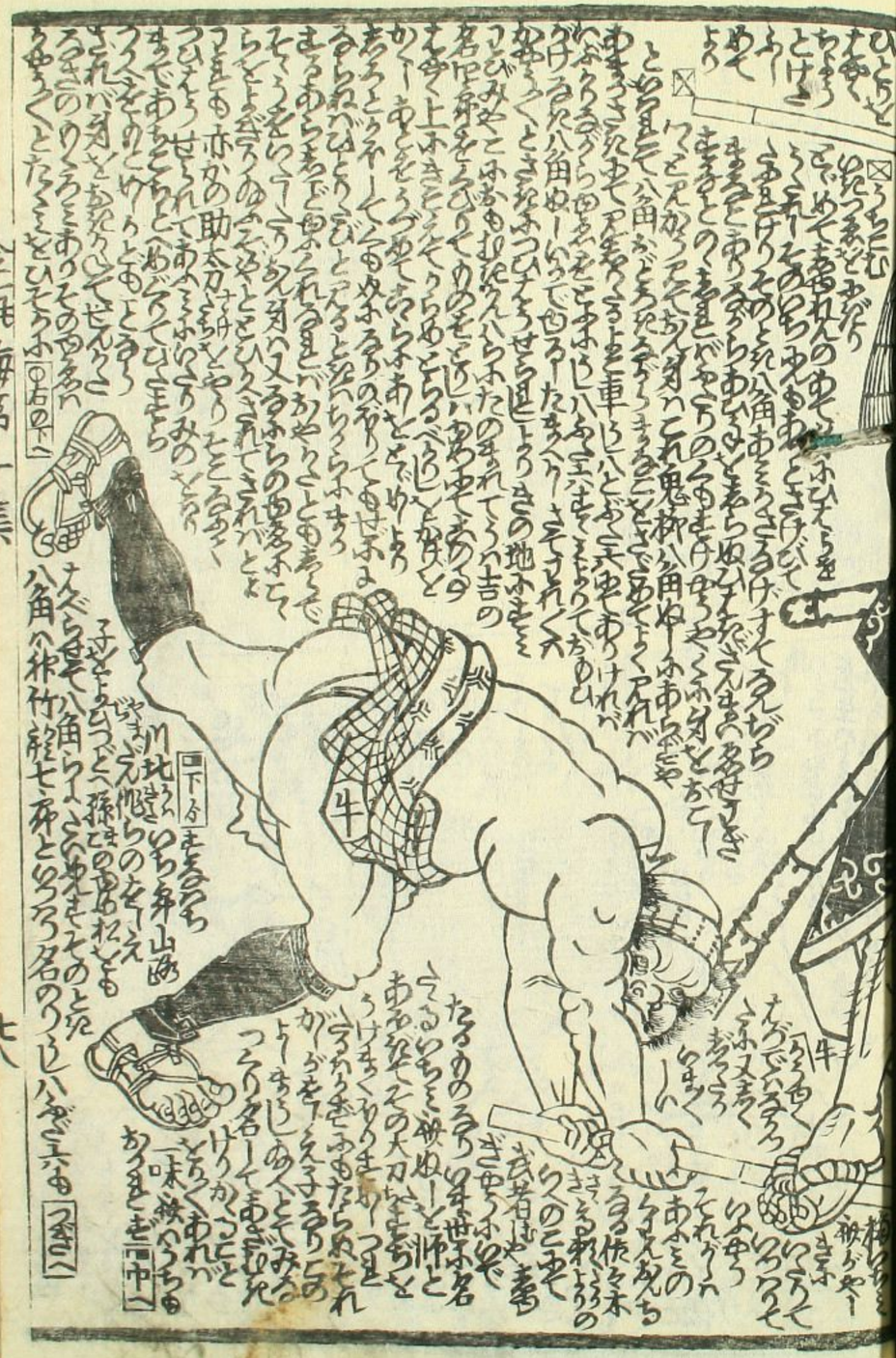
右の下へ

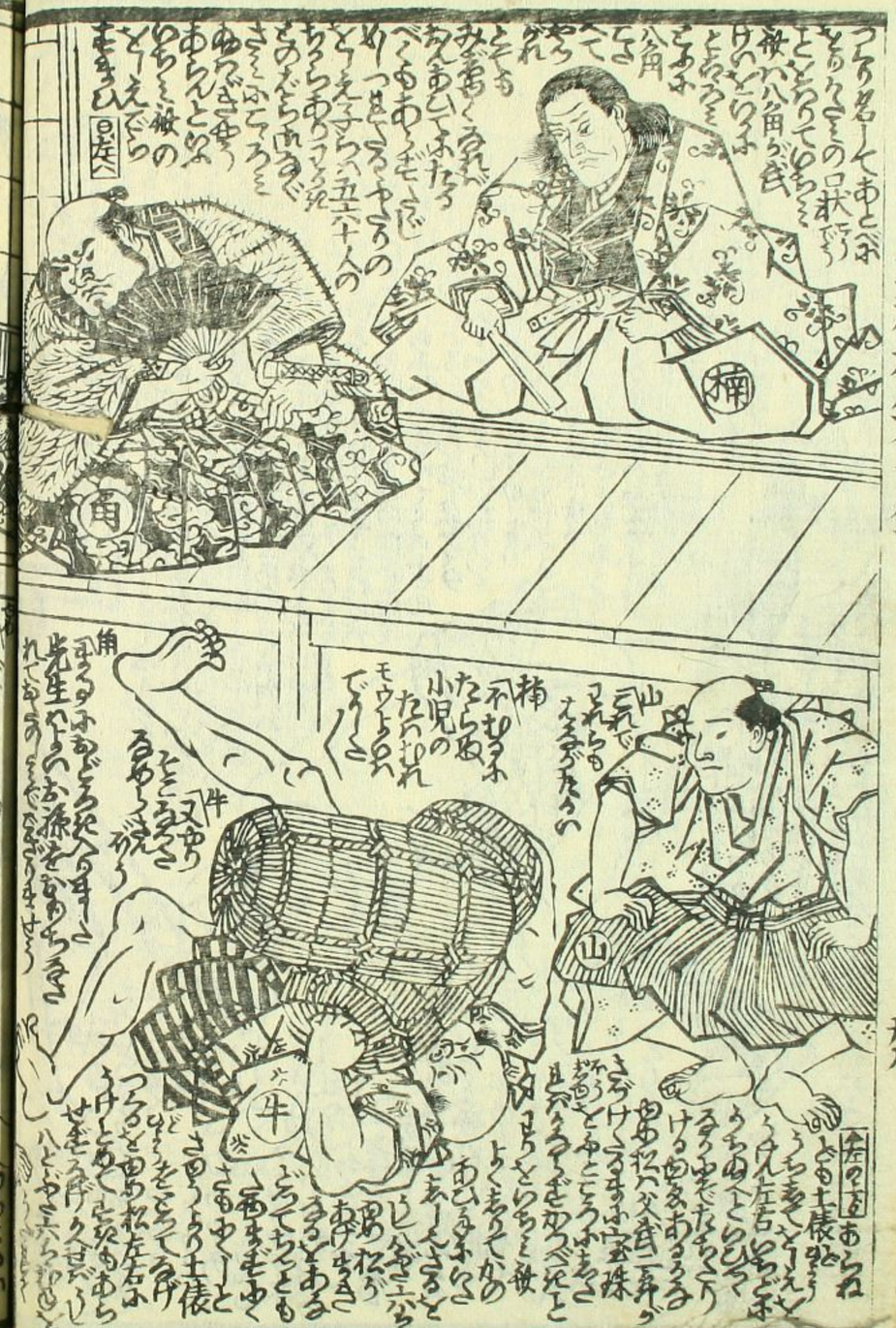
意
念
玄
年

啓蓮虫の圖

千
石
賈
左の上人

豚
角
牛


牛


柳
角
山
牛

夢
豚

夢
牛
角
豚
石

新編金瓶梅十輯

四冊　曲亭馬琴翁作
一陽齋豐國画

女郎花五色石碁

初編　曲亭馬琴翁作
四冊　一陽齋豐國画

児雷也豪傑譚七編

出板　美圖垣笑顔作
一陽齋豐國画

新編金瓶梅

十集 下帙 下

曲亭主人著述

一陽高豐國画

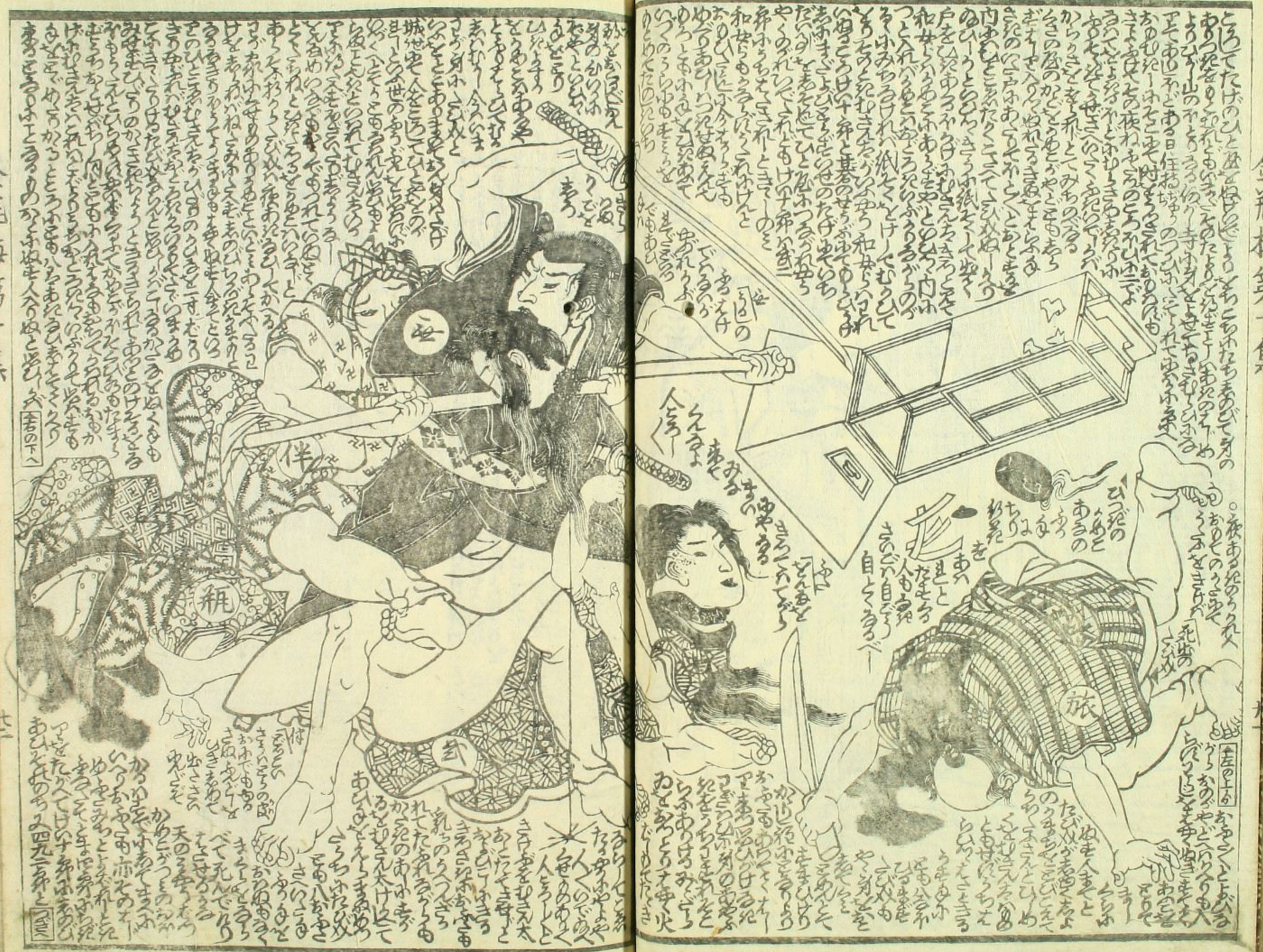
新編　甘泉堂様

壺瓶梅

中集之四

曲亭馬琴作

一陽斎豊国画


旅
絎
伴

松
竹

松
実
豆
白

諸行無常
是生滅法
陸
木
白

武太郎
八角

松
実
梅
夢
二

千
と
石

施
石

陸
白
鳥
呉

甘泉堂蔵板略目

壽福三世相大鏡

世に世おの形板多くしてとも山大鏡八二枚と号とく義とさしく狂とさらの因とる元彩と色てよくと人敬せく生れきくるおすの若四八落ちの身にてをのりくるる海獺うそ生をの死てくるの愛紙のへぐそのくかくするよくーかくびくいくぐすれば若なのりと字ふ佐うと元ヨくのうう海きのうくもとる元てひくふのく通とと元麦彩国者のみ元しく

源氏繪かるた

松彩之相壺

そのとき時のの人教ふ会せて北とす紀とす紀とのの名のようり衡て溶ふかふ松る乳とその名のとにおきて多くまと揃ひるとよりとする右八虎子振ぐこに源氏の目録とする右ーー光ん之を書校絵にあ戸きるぐさみよるーき品ある

源氏寿かるた

第入

江戸流行 菓子話瓶橋

元食用に精密なる八未松みまるるの色を大江戸ふようといるを世界一と唱ひ近世菓子乃一流相元とよばれる和橋屋ヶ家製乃仕法手本ふ松のの傳をもて一すずしくつまげるふ右色しく菓子ようと千菓子ふ右物かつるまに十ケ條わり菓子通の伝記古一筋と弟ふ

江戸書肆　芝神明前　和泉屋市兵衛

早稲田大学図書館
011688991198